

ログ・ホライズン 橙乃ままれ

変転あるいは〈記録の地平線〉のバーベキュー



昼前の十時という時間は、朝の早いセルデシア世界においてはアキバであってもひと仕事を終えたタイムミングにあたる。

《大地人》たちは夜明け——つまりは朝の五時くらいから活動を始めるために、彼らと生活タイムミングを合わせる生産型ギルドの《冒険者》もまた彼らと似たような時間で生活をしているし、遠征の狩りに行く生活型ギルドの《冒険者》も似たようなものである。

そんな人々にとって、この時間は、もうすでにその日の仕事の大半を終えて、あるいはもうすでに切り上げようかという時間なのだ。

その日もそんな一日で、そんな時間だった。

陽気はうらうらと穏やかで、活気もありつつどこかまったりもして、気持ちの良い陽射しのなかでアキバの街が生活音で満たされている。

ここ、ギルド《記録の地平線》の古代樹に守られた本拠地では、そんな日差しがモザイク模様のような木漏れ日となつて差し込むガーデンテラスにてランチ会が開かれていた。

最初の参加者はシロエとアカツキ。そしてやつてきたセララ。三人はテラスの丸いテーブル（少人数用）に座つて街を見下ろしながらゆっくりとミルクコーヒーとベーグルを楽しんだ。

このメニューはセララが用意してくれたものだ。客人に茶の用意をさせるとは情けない話なのだが、シロエもアカツキもそちら方面の能力は壊滅的なのである。にゃん太に会いに来たセララのお土産であるベーグルを食べながらのんびりしていると、話し声が階段を上がつてきた。帰ってきたのはにゃん太と五十鈴、ルンデルハウスだ。

買い物帰りらしい。

三人がヨーグルト味のベーグルを食べているのを見たにゃん太は、すかさずラタトゥユとスパニッシュオムレツをサーブした。

腹ペコ揃いのこのギルドの厨房を預かるにゃん太が出した結論がこれで、《記録の地平線》の厨房でもっとも高価な魔法の品《雪国山小人の冷蔵庫》^{スノードワーフ}には、作り置きのお惣菜が小隊規模なら賄えるほど用意されているのだ。

人数の増えた《記録の地平線》では食料の消費量がとんでもないことになっている。

トウヤとルンデルハウス、そして直継の三人は競い合うようにびつくりするほどの量をたいらげるのだ。実を言えばミノリや五十鈴、セララという女子組だつて健康家である。そこに加えて、生来の食いしん坊とも言ふべき《彷徨う貧乏姉妹》^{ワンダリング・ファキュート}モフル姉とモフル妹が加わり、厨房はまさに最終戦争状態となっている。

《冒険者》の懐は暖かく、年少組でさえ一日の稼ぎで、日本円にして数十万円から数百万円感

覚の利益を上げることが可能だ。だから、資金面での心配があるわけではない。むしろ、どちらかと言うと、消費速度に調理速度が追いつくかどうかというのが焦点だった。

単純なスピード競争という意味でも問題はあるのだが、この年代の少年少女はなんだか二十四時間空腹でいるみたいで、それにもやん太を悩ませた。また、ギルドメンバーが十一人になったことで、互いの生活時間がずれるというのも問題で、意地っ張りなギルドマスターは、それでも夕食を皆で取ることにこだわったが、だからこそ朝食や昼食は個別であることも多かった。

「この卵焼きは美味しいな」

「オムレツだよ、アカツキ」

「オムレツは三日月型だろう？」

「ふふふ。それは四角いオムレツなのですにゃ」

じゃがいもとコンビーフの入ったオムレツはオーブンで焼き上げたどっしりしたもので、皿の上にあるのはそれを四角く切ったひとかけらなのだった。ソースをかけないでそのままでも十分、さらに冷めても美味しいにやん太特製のオムレツである。

シロエはそんな言葉を聞いてほとんど反射的にひとくち食べて、その美味しさを味わった。たぶんだけれど、すごく小さなアンチョビが入っていて味のアクセントになっているし、シロ

エの知らない小さな緑色の丸い実も爽やかに辛い。

最近ではミノリや五十鈴、もちろんセララも手伝っているという自慢のお惣菜は、朝ごはんを食べずに書類仕事をしていたシロエにとっては百点満点以上のものだった。

料理の感想会を開いている間に最後の一団も帰ってきた。

胸を張って揚々と帰還したのは、自称銀河のアイドル、てとらだ。両脇に忠犬のごとく自慢顔の〈古来種〉姉妹、レリアとリトカもついてくる。訓練教官役をしてきたらしい直継と、トウヤ、ミノリの双子がマグカップによく冷えたミルクをうけ取りながら、方形の大きなテーブルに着いて十一人。今のギルドメンバーとセララが全員揃ってしまった。

「昼前なのに、珍しいねー」

「そうだな」

直継に早速よじ登り始めたアイドルが、笑顔で歌うように告げると、最近上機嫌のアカツキがそんなふうに戻した。

「班長！肉とってきたよ！焼いてよーう！」

普段は年齢以上に大人びているトウヤがこんな時には素直に甘えた声をだすので、シロエはくすりと笑う。

「そうなのー!」「そうなのです!」

民族衣装に身を包んだ二人の少女がチャンス到来とばかりに絡んできた。

「わたしたちはてとら隊長の」

「隊長!」「隊長!」

「指示に従って、今日は生活費を稼いできたのです!」

胸元のがま口を振りかざして、レリアⅡモフルが所帯じみた宣言をした。妹のリトカⅡモフルといえば「どうだ、うちの姉さまはすごいだろう!」とでも言いたげな表情で得意満面だ。

「ふむ、お肉ですかにや」

突然の無茶振りににやん太は手袋に包まれた指先で顎を撫でると、ふむう、と唸って意味深な視線をシロエに向けてきた。

シロエはびっくりして、そのあと悩んだ。にやん太に何かをうながされるような、そんなやり残したことはあるだろうか? 予定してたけどみんなと話さなきゃいけない会議とか? 年長者会議かな。ミナミの街に出かけるのは来週だし、準備は進んでいるし。

「主君?」

呆れたようなアカツギが、おでこを釣り上げるような仕草をしたのでシロエは言いたいこと

をやつと理解した。

「そうだね。せっかく良い天気で全員揃ったんだから。本日の業務は、バーベキュー! みんなで夜まで、ゆっくりしようよ」

「やった!」「やりました!」「バーベキュー!」「それは魅惑の!」「焼!きぎ!のこ!う!」「なんですよ! お肉だよつ。アイドルの祭典だよっ!」

腕を組んで器用にしゃがんだり立ったり踊るモフル姉妹にてとらが雷を落とすのを背景に、トウヤとルンデルハウスは早速バーベキューコンロと網の準備を始めていた。テラスガーデンのあるこのギルドでは、意外に登場頻度の高いアイテム(ミチタカ製)なのだ。

そしてその日はお休みとなった。

定休日なんていう概念がないセルデシアである。いや、もしかしたらあるのかもしれない。だとしたらブラックなのは〈記録の地平線〉だけ? などと悩むシロエを、アカツギが「また悩んでいるな」とつづいた。親友である直継は「年中無休なのは、シロただけだぜ祭り」と呆れ顔だ。

一方で毎日が日曜日のモフル姉妹はてとらの指導に従って、食料を皿の上に並べては網へと補給している。

時間はまだ正午前。

そう考えるととてもなく贅沢な気分がこみ上げてきた。

なにせ、肉と野菜を焼いて、みんなでゆっくり宴会をしても、夕方にすらならないのだ！
たまにはこんな時間もいいものだな、とシロエは思う。

直継とふたりで、にゃん太班長特製サングリアで乾杯したのも大きい。アカツキも成人だということで、ちょっぴり舐めてみたようだがジュースに切り替えてしまった。班長がお酒を飲んでいるところは見たことがない。

そんなわけで直継とふたり酒だ。これは珍しい。

「ふたり酒じゃないんですりやよう！ シロエさん！」

「……飲んでるの？」

だがシロエがそんなふうにしたのはほんと隅っこで直継と乾杯しているのを良しとしない人物もいたのだった。ノースリーブの燕尾裾ブラウスという軽やかな装いのところがグラスを片手上機嫌で直継に絡み始めた。

「直継ちゃん！」

「登るな。おい。バカ！ ふともも当たってんぞ!!」

「かたいこと言わないでくださいよ。ただでさえ鎧がゴツゴツ硬いんですから！」

「今日はもう着替えただろっ」

直継も、シロエも、そしてとらも部屋着だ。それだけでなんだか「今日はもう仕事するつもりはありません！」と宣言したようで、シロエも良い気分だった。もちろん、ちよつとばかりほろ酔い気分になったからって、とらを制止しようとは思わない。シロエはギルド内の交流を大事にする穏健派ギルドマスターなのだから。

「ボクだってお着替え完了ですよ。アイドル生着替え一本勝負金網電流デスマッチですよ」

酔っ払ったせいか頬を染めてくねくねするのとらを、直継はその大きな手で抱え上げると頭の上から目の前におろした。

「つていうか。てとら。おまえ、酒飲んでいいのか？」

「いいの？」

その件は流石に気になってシロエも尋ねる。今までいっしょに過ごした時間と会話から、おおよそ成人だろうとアタリはつけていたのだが、この世界の容姿は時に当てにならないのだ。それは主に肌のきめ細かさなどの部分であるのだが、確認は必要である。

「もちろんじゃないですか。ボクは成人アイドルにしてアイドル星人ですからね！ お酒は二十歳をすぎてから。よくわかってますんぷはあ」

「前から思ってたんだけどおまえ幾つなのよ」

ビールでもないのに豪快にあおって「美味しい！」と宣言するのとらに呆れて、シロエと直継は視線で意思疎通した。

「えー。直継ちゃん。ボクの年齢に興味☆津々ですか」

「言い方がムカつくからNo」

にまにまといつてくるでとらに、直継はきっぱり拒否を告げるが、その一方で「おまえ水飲んだほうがいいぞ」とグラスを手渡ししたり「落ち着け、ここに座れ」と席を用意したりするあたり、本当に面倒見が良いと思う。くすくす笑いのでとらと話し合ってるその光景を見て、マリエさんも心配絶えないはずだよ、と他人事のようにつぶやくシロエだった。

「——ちよつとまつてるシロ。こいつの年齢確かめてくるから」

「やーん！ 照れちゃうなあ！」

直継とてとらがそうやって引つ込んでしまつて、視線を戻せば、バーベキューはまさに盛会だった。バーベキューコンロからは油の焦げる香ばしい匂いが漂い、カットされた色とりどりの野菜と、分厚い肉が乗っている。まちぎれないのか、肉の好きなトウヤがトングを持ってウロウロしているが、にやん太の的確な監視下においてつまみ食いにはほぼ不可能だろう。セララと五十鈴はサラダの盛り付けで盛り上がり、ミノリは飲み物係のようだった。

「リトカはねー。おこたで寝てたら、なんか、どんどーん!! つて石が降つてきて、でられなくなつちやたの」「おこたシェルターに避難してたんですよ」

大きなクッション付きの椅子に、左右からふたりで腰を掛けた姉妹が台所で報告をする子供

のように、アキバに来る前の冒険の話をしていた。〈大災害〉の直後の話のようだ。

「がんばったんですにや」

「えへへー。そうでもあるのだ。皇帝だから！」

こんがり焼けた大型マッシュルームをにやん太から貰つてはむはむと食べるリトカは得意満面で自慢をする。

「いっぱいキノコさんいますもんね」

「リトカの臣民なの！」

セララの〈歩行茸〉マイコドとリトカの〈輪行茸〉マシキルムや〈芳香茸〉マツクコニドは仲良くなったようだ。お皿を頭上に抱えて踊っている。ゲームみたいな光景だな、と思ったシロエは小さく笑った。そんなことを今更思うだなんて鈍いな、と自分がおかしい。

「そういうミス・セララだって〈大災害〉の直後は大変だったのだろう？ 北の国で騒動に巻き込まれて身を隠していたと聞いたが」

五十鈴の近くでサラダ用ナッツを砕く係をしていたルンデルハウスが、柔らかい口調でセララに話しの接穂をふった。貴族的な言い回しに隠れているけれど、気遣いのできる青年なのだ。シロエは彼を助けられて本当に良かったと思っっている。

「いえいえ、わたしにはにやん太さんがいてくれましたから」

「うふふ」「ふふふ」

だがそんなシロエの感慨は、年頃の少女たちにとってはなんの関係もないみたいで、ひとかたまりになってじゃれあうように含み笑うと、いささか揶揄するような表情で咳払いをするのだ。

「聞きましたか、ルディさん。『わたしにはやん太さんがいてくれましたから』ですって。ふふふふ」

「なんでさん付けなんだ。変な口調だし。ミス五十鈴」

揶揄されたセララは「ちがうんですよ？　そそそそ、そういう意味じゃないんですから!!」と顔を真赤にしてワタワタと手を振り回すし、「にやん太さんなんとか言ってください!」とセララに救援を求められたにやん太は「閉じ込められて窮屈な環境でも、毎日家事を頑張っていたセララちは、当時から立派な淑女でしたにゃ」とコメントをしてさらに場を混乱させていた。

押し合いへし合いしつつ料理をするミノリやセララたちを見るとなんだか温かい気分になる。自分の作ったギルドが、そう悪い場所ではないなんて気持ちにもひたれるのだった。

「シロ！　やばい！　てとらのやつ」

ほんの少し慌てたような声の直継がてとらを抱えて戻ってきた。

「はっはーん！　なんとボク！　シロエさんより先輩だと判明！　アキバを照らす薄明の一番星、銀河のアイドルにしてこのギルドのプリティ——」

「牢名主」

「牢名主じゃないよ！　アカツキさんっ。アイドルだよっ！」

ほんの少しだけ自慢げなアカツキがてとらを阻止して小さく胸をそらした。人形のように整った美貌を持つ少女であるアカツキだが、シロエにとっては長い付き合いの相手でもある。最近では、彼女が、控えめな仕草と仏頂面に近いような無表情の中に、実は色とりどりの感情を秘めていることもわかってきた。今の仕草は「嬉しい」「自慢したい」「関わりたい」だろう。

人見知りの激しいアカツキがコミュニケーション能力が高くてある意味相手を選ばないてとらという仲間と意外に仲良くやれているのが、シロエには嬉しい。

まあそれはそれとして、牢名主なんて単語をなんで現代の乙女が知っているのか？　とてもじゃないが日常用語じゃないはずなだけど……そんな気持ちをこめてアカツキをじっと見つめると、花のように微笑まれた。あんまり自信はないが、シロエからするとカブトムシを取った少年みたいな笑みだ。ということにしておきたい。

「てとら……にえーは？」

「てとてとは武勇伝^{ブユウデン}ないのー？」

てとらが宴に戻ってきたので、話の流れがまた少し変わったようだ。

「ボクの〈大災害〉直後といえば、まあ、麗港シクシエルとかミナミの街でボランティアですよね。炊き出しやったり、周辺のモンスター退治やったり。歌って踊れるアイドルですから？ そりゃもう人気者ですよ。困っちゃう感じで」

「そうなんですか」

最近では年少組の狩りの引率役が多いてとらはずいぶん慕われている。モフル姉妹には「隊長」と呼ばれているほどなのだ。まわりつくモフル姉妹を適当にあしらいながら、細い指先を顎に当てたてとらは、可愛らしい仕草でてんと首をかしげた。

「まあそれでカズ彦さんにひろわれて、つるんで治安活動なんてやってたわけですけど……。もうなんでカズ彦さんはボクをこっちによこしちゃったんだか」

聴き逃してしまいそうなほどささやかな口調の重さはてとらの煩悶を表していた。ミナミへの特使派遣を前にしたこの時期、〈Plant hwyden〉の情報はいくらでもほしい。でも、シロエはカズ彦と連絡を取れずにいるし、それはどうやらてとらもそうであるようだ。念話リストに存在しないわけではないのだが、こちらからの通話要請に応えない。

どうにもややこしくこんがらがった事態に巻き込まれて、カズ彦は困った状況にあるのだとシロエは思う。にやん太班長の辛い報告を聞いた、それが感想だ。

「『アイドルだから！』『お肉くれるから！』」

「そっかー！ ボクがアイドルだからだったんですねー！ よーし、よしよし。リトカはい子！ 肉をあげよう！」

それを察したのかどうかはわからないが、ミノリたち年少組がてとらに一斉に声をかけた。てとらは一瞬で機嫌を直して、につこりすると「はひゃあ」と目をつぶるリトカの豊かな髪を手ぐしでかき回して、にやん太から極上ローストを一切れ受け取って皿にのせる。

「むはははは。よきに計らうにもゆもにゆ美味しい!!」

「リトカばかりずるいですよ！ わたしもにゆこれ美味しい!!」

純真で愛らしいモフル姉妹は（自分たちでは年少組の守護者と名乗ってはいるけれど）すっかりミノリたちの子分的な立ち位置になったようだ。とはいっても、みんなに餌付けされてとても幸せそうである。

ちちちちち。

軽やかな泣き声とともに、小さくて優美な鳥がテラスの柵の上で小首をかしげている。

「はいはい。まっけてくださいね」

セララがそんなふうに呟いて、ゴマのように小さな豆か種をちよつと離れた部分にのせると、小鳥は跳ねるような横ステップで近づいてきて、しきりにくちばしでくわえ込む。息を詰めて見つめていた一同はそれに気がついてこっさり笑った。

〈三日月同盟〉のギルドハウスは、アキバのギルド会館のなかにある。バーベキューをするようなスペースはもちろんテラスもないそうだ。小鳥に餌付けをするのは、だからとても面白いのだという。

ローストされた肉が本格的に運ばれてきて、シロエもそれを味わった。「うんまい！」と叫んだトウヤと、興奮を抑えようと必死に話しかけるミノリを中心に、お昼の食事はますます賑やかになっていく。

とても幸せな宴会なのだけど、どうもそういう場に不慣れなシロエはおとなしく座ってみんなの話に耳を傾けるばかりだ。そしてそれがとても嬉しい。

「でもね、ギルドマスター」

「どうしたの？ ルンデルハウス」

そんなシロエの隣の席に、ルンデルハウスが腰をおろした。

年下の友人にシロエは尋ねて、少し疑問に思った。彼が五十鈴やミノリやセラウたちの保護者というか、後見役を密かに自認していることは知っている。優しい青年がそちらを離れてひとりシロエのところへ来るのは珍しいことだ。

そんなふう考えたシロエに、ルンデルハウスは「〈大災害〉のときさ」と告げた。

爽やかな風がざんと梢を揺らして、ルンデルハウスの言葉の続きをさらう。吹き抜けた風

の行く末にふたりはしばらく視線をやっていたが、ルンデルハウスは言葉を選ぶように語り始めた。

「〈冒険者〉特有の言い回しだとわかつてはいるのだが、ダイ・サイガイというのは『巨大なる災い』というような意味合いなのだろう？」

「だいたいそうだね」

話の行方がわからないシロエは素直に頷く。

「——その名前は変更できないだろうか？」

ルンデルハウスは、騒がしく肉を取り分けている仲間たちに視線をやったまま、そう口にした。

「たぶん〈冒険者〉にすれば紛れもなくその名称は事実なのだろうが——悪いことしか起きなかったわけでもない僕と思うんだ」

「ルンデルハウス……」

「僕はアキバに来て〈冒険者〉になった。みんなとも知り合うことができた。他にもきつと良いことはたくさん起きているだろう。難破した船の被害を嘆いて、たどり着いた砂浜の小さな花や貝殻を忘れてほしくはないんだ」

柔らかな前髪に隠れて、透明感のある青翠の瞳が揺れていた。この青年はこんな表情をするんだな、とシロエは思っ、その視線の先ごと好きになった。この人間をギルドに招いて

良かった。そう思うことが、ギルドマスターという煩雑で面倒な立場にある者にとって数少ないが大いなる慰めであることに、シロエは気づいた。

「そっか」

ここに集まったギルドの仲間たちの全員が、シロエにとって自慢だ。

親友の直継も、いつも隣りにいてくれるアカツキも、敬愛するにゃん太班長も、シロエにはもったいないミノリも、勇敢で思慮深いトウヤも、優しくて気遣いのできる五十鈴も、本当は聡明なルンデルハウスも、面倒見が良いとらも、人なつっこいリトカと礼儀正しいレリアも、みんなシロエの自慢である。――ミノリに預けられていた手紙を読んで以来まっている次のひとりも。

「そうだよね」

なんだか眩しく思えて目を眇めたシロエの視線の先で、自分にできる全力で戦った少女少女たちが賑やかにやり取りをしていた。たぶん、時間が流れたのだ。あの賢い弟子が挑んだように、そう決めたのなら、シロエも時計の針を進めなければならない。

本当は流れていたものなのだ。せき止められていたのなら、それはシロエや、〈大災害〉にあった〈冒険者〉のみんなの心が凍りついて、未来を拒んでいたからなのだと、シロエは今そう思った。

爽やかな風が心に吹き込んできた。ルンデルハウスがもたらした新しい視点は、いまはまだ

影も形も見えないけれど、それでも〈世界級魔法〉の芽生えをどこかで感じさせた。

それはしつとりと露を含んだ梢を渡る緑の風の気配だった。

「――うん。そうだよね。〈大災害〉からも卒業しなきゃ」

「主君、どうした？ 嬉しいことがあったのか？」

そんなシロエに、小さな護衛が問いかけた。

いつの間にかいなくなつて「なんとおー！」と五十鈴に叱られているルンデルハウスに代わつてベンチの隣にじり登つていたのだ。

身を乗り出して「ほんとか？」と疑うアカツキは、サイズオーバーのフード付きトレーナーを着てシロエを睨んでいる。いつも寄り添ってくれる小柄な少女の気難しげな叱るような表情に、シロエの胸は暖められて、なんだか恥ずかしい言い回しだったと微笑んだ。

「けっこうね」

「そうか」

いま喜ばしいことが起きたのだ。

――〈変転^{リイシユン}〉って呼ばれると、いいな。

シロエはそう思った。

すべては移り変わっていく。冬は終わり夜は明け、風が過ぎ去り雨は止むだろう。もちろんすべてが良くなるとは限らないけれど、すべてが最悪である蓋然性は極小なのだ。この世界の

すべてが無制限に救済はされないだろうが、同じようにすべてが呪いの海に沈むことはない。
花も咲けば鳥も歌うのが世界なのだ。それはその世界が地球であれセルデシアであれ変わ
らない。

そうあれかし、とシロエは願った。

願いが叶うのだということをシロエはもう疑っていない。いくつかの大きな謎を残して、シ
ロエは〈共感子〉の意味を察し始めていた。だから俯くよりも顔をあげるべきであり、その衝
動は夜明けの予感を伴っていた。

「よくわからないぞ。主君」

「今日みたいな日を、また過ごそうね。ってこと」

桜色の唇を尖らせるアカツキに、シロエはそう応えた。時間は流れてゆく。日々を寿ぐ者^{しほぐ}に
とって、明日は今日よりもより良くなる。時計の針は決して歩みを止めること無く、過去を未
来へと押し流してゆくだろう。

だが、いまこの午後は十分に残されている。

〈記録の地平線〉は、まだ産まれたばかりの場所なのだった。



本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化）等並びにインターネット上への掲載（SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む）は禁止いたします。

本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても禁止いたします。